

②〇 『新たな旅立ち』

ちえが住む家は、共同の浴場から通りを越えた川沿いにあつた。

四軒がひと棟の長屋がふた棟並んで、棟と棟の間は川の水を引き込んだ水汲み場になつていた。

襷がけの女が一人、厚い肉の付いた背中をこちらに向けて何やら洗い物をしている。その背中に向かってちえが声をかけた。

「ご亭主はまだかい、おふでさん」そう声をかけられた女は、顔を半分だけこちらに向けて

「帰つただけだね、途中で野良犬に脅されて田んぼにはまつたんだつて。着てる物は泥だらけ。まつたく、碌な稼ぎもない上に本当にドジで間抜けなんだから」と憎々しげに応えた。

「そんなこと言うもんじゃないよ。優しくていいご亭主じゃないの。」とちえに言われた女は、その泥だらけの着物を洗つていたらしい手を止めて立ち上がると

「おや、お客さん？」とみちの顔に目をやりながら

「そりゃあ、やくざもんのあんたの死んだ亭主に比べりゃあまだましかもね。あら、言い過ぎたわね。」と返した。

「あいつは亭主でも何でもありません。気にしないでよ。死んでくれてこんなに嬉しいことはなかったんだから。」

「そうだね、おちえさんも随分苦労だったもんね。あんたにもその内きつといいことがあるよ。そうだ、お客さんなら煮物の余分があるので、後で届けるから食べてよ。」

ふで、と呼ばれた女は、鏡餅のように丸く色白の顔を二人に向け

「干鱈のダシが効いてて旨いんだから。さつき隣のおかつさんにも分けたらお返しに木の芽和えをくれたから、それも半分持つてくね。」と言ひ足した。

聞きながらミチは、小さな長屋の毎日の暮らしを容易に想像することが出来るようで、おちえさんも今は案外しあわせなのではないかしらと思つた。

ちえに続いて家に入ったミチは、随分さっぱりした家の様子が意外だった。

入り口のすぐ右が流しになつていて、その脇にカマドがある。流しの上の棚に茶碗とお椀、それに皿が一枚と鉄なべが乗っているだけだった。

板の間に小さな丸いちゃぶ台が一つ見えるが茶箆筒は無い。ちえが境の障子を開けると、六畳の畳の部屋が見えた。だけど、家具らしい物は何も見えず、小さな鏡台と行燈があるだけだった。

「殺風景な家だろ。あいつが死んだ後で何もかもみんな捨てた。竈の灰まで捨ててやった。あいつのことは思い出すだけで胸が悪くなるので、茶碗もお釜も布団も、私の着物まで

せくぶんぶ捨てて古手屋で買い替えた。畳の表も障子も張り替えて、越して来た時と同じ状態に戻したら、少しは気分が変わったよ。」

押し入れから布団を引き出しながら、自分は勤め先で夕食をいただける、お釜に昼炊いたご飯があるので、おふでさんがおかずを持って来たなら、一人で食べて先に休んでいるように、そう言うときえは慌ただしく仕事に出かけて行った。

入れ替わるようにおふでが煮物と木の芽和えを抱えてやって来た。

ちえの家に初めてやって来た客が珍しいらしく、上がり框に腰をかけると

「昔の知り合いかい？」と尋ねた。浴場で知り合ったばかりだと答えると、よほど驚いたらしく

「へーっ、人つて変わるんだね。以前は顔を合せても口も利かなかったおちえさんが、私達長屋の者と軽口を叩くようになったのは、つい最近のことだからねエ。それが、知り合ったばかりの人を家に連れて来るなんて、以前のおちえさんからは全く想像ができないよ。」と全く意外だという話し振りだった。

ちえは、言った通り四つ半(十一時頃)に戻って来た。行燈の明かりで書き物をしていたミチが顔をあげると、目の前にこぼれるような笑顔のちえが立っていた。

「あんたが待っててくれると思うと、もう嬉しくて。うち

に帰るのがこんなに楽しみだったの、何だか生まれて初めてのような気がする。」

言いながらぺたりとミチの前に座ったちえの顔は、浴場の前で出会った時とはまるで違っていた。

皺つぽく白けて見えた顔が、今は生氣に満ちて一気に十年は若返ったようだ。

思い出話は、記憶を手繰るようにして、胸の中にゆつくりと思い描いて話すものだが、一つの夜具に二人でくるまった後のちえの思い出話は一気呵成だった。まるで大堤の堰が切れ、怒涛の水が溢れ出る勢いだった。

今、間違はなくちえは生まれ変わるうとしている。越前小浜を捨てた後の、不本意だった二十年余りをきっぱりと切り替え、新たな旅立ちをしようとしている。ミチはそう感じた。思えば、利之助を亡くした後、立ち直るきっかけをくれたのは利之助が残した一冊の綴りだった。

俳諧を、いや、ミチをもっと分かつと、こつそり勉強をしていた控えめな利之助の優しさだった。

ちえの話に頷きながら、ミチの胸の中にもまた、明日からはもう一度気持ちを新しくして、ちえのように新たな旅立ちをしよう、そういう思いがゆつくりと湧き上がって来た。